

小さい頃から、憧れ続けていた夢

小学生の頃、将来の夢という文集に「宝石屋になりたい」と書いた藤澤。もともと、プラモデルなどのモノづくりが好きだったことや、近所にジュエリー加工の工房が数軒あり、作業をみているうちに、宝石や貴金属加工へ憧れるようになっていった。

高校時に進路を考えているとき、3つの選択肢があった。1つ目は、当時最先端であったパソコンの専門学校への進学。2つ目は、ブラジル留学して宝飾の勉強。3つ目が、山梨県立宝石美術専門学校であった。小学生の頃からの夢を叶えたかった藤澤は、一からジュエリー加工について学べる宝石美術専門学校、当時あった一般課程という午前中の半日授業を行う課程に入学した。午前中に学校で知識と技術を学び、午後は手作りをメインに行っている宝飾会社に就職し、実務をこなしながら技術を高めていった。

藤澤が就職した頃、バブル絶頂期で宝飾加工は量産が主流になってきた。しかし、藤澤が勤務している会社は、量産をあまり行わず、手作りにこだわっていた。それが、モノづくりが好きな藤澤を夢中にさせていった。

職人藤澤の始まりである。

経験をこなすことで掴んだ技術

藤澤は「職人でいちばん大切なのは、経験であり、経験を数多く積むことで、技術や知識が身に付いていく」という。職人を始めた当初、けっして器用な方ではなかったが、仕事が終わった後や、休みの日など先輩たちが教えてくれる日に会社に出て、人一倍作業に取り組んだ。藤澤にとって、作業を行えば行うほど、体が技術を覚えていく感覚が楽しくてしょうがなかった。最終的には、「もっと、作りたい。もっと、時間がほしい」という思いから、自宅に作業台を設置し、家に帰っても製作活動を行った。最初は製品の磨きなどの基礎から入り、次のステップでは原型や手作りの作品の製作。気がつけば、ジュエリー製作のオールマイティーになっていた。

職人初期の頃、先輩に「デザイン画を見ると、その物を立体で想像できるようになる」と言われたことがある。はじめは、何を言っているのか分からなかったが、作業をこなすことに蓄積される経験と知識によって、頭の中に立体像が出てくるようになった。10年後には、デザイン画から横面や裏面、ろう付け部分など、細かいところまで頭の中で立体で想像できるようになった。

今を広げ、未来に繋いでいくために

ジュエリー製作を初めてから20年、藤澤は独立し、現在の工房「雅」を立ち上げた。ここでは、作品製作から磨き、修理などあらゆることを行っている。現代のような大量生産・大量消費の時代では、壊れてしまったら新しいものを購入するのが一般的だが、藤澤は「良いものを、長く使ってもらいたい」という思いから、手作りにこだわっている。そこには、培ってきた経験を活かすことはもちろん、手作りならではの柔らかさや、細部に宿るきめ細やかさを大切にしているからである。

藤澤の工房に、「やる気があれば必ずできる!」「永遠に自分は進歩したい!」「現在の努力で未来は築かれる」という言葉が貼ってある。それは自分自身、現状に驕ることなく、制作意欲を高め日々探求し続け、未来へ向けて常に前進し続けている証でもある。

最近では、ジュエリー・リモデル・カウンセラー1級の資格を取得し、「母のジュエリーを新しいデザインにしてほしい」というようなリモデルの仕事も行っている。そこには、数多くの貴金属の特徴や石の性質について触れ、学んできた技術と知識が活かされている。

また、ジュエリー産地として、技術と誇りを広げ、未来に繋いでいくために研修を行ったり、山梨県技能士会でのコミュニケーションや山梨ジュエリーミュージアムでの実演などの活動にも積極的に取り組んでいる。

新しい探求と挑戦を追い求めて

デザイン画からデザイナーの意向を汲み取り、ジュエリー製作をすることが今、一番楽しいという根っからの職人である藤澤。「これをどうやって作ろうかな。ここはどうやって加工しようかな」と考えているときに、辛くもあり楽しいときでもあるのだという。

その一つ一つの課題や問題を乗り越え、完成した際の達成感がたまらないのだ。ときには、無理難題なデザインの依頼がくることがあるが、その場で打ち合わせを行い、藤澤ならではの貴金属加工の案を出し、お互いに納得したものを制作していく。

ジュエリー製作で一切の妥協を許さない。ときには採算度外視で製作に没頭してしまうことがあるのだという藤澤。「根っからの職人なんだよね」と笑顔で語った。



藤澤 一雅 (ふじさわ かずまさ)

宝飾加工・ジュエリーマスター (山梨県認定)
やまなしの名工 (山梨県知事表彰)
貴金属装身具製作技能士1級
全技連マイスター

工房「雅」MIYABI
甲府市後屋 323-4 後藤ビルB202
Tel:055-287-7319

